



2010/04/01

SINCE 1980/11/30

鳥との出会い/セッカ

30th Anniversaries

関西に住み始めてもう30年。高知の片田舎で高校まで過ごし、特に小学生の頃は自然の中にどっぷりとつかって毎日を過ごしていました。川で泳ぎ、田んぼで遊び、生き物と触れ合うのはあたりまえ。そんな豊かな環境に育ったせいか逆にあまり生き物を意識しなかったのかもしれない。

そして大学に進み、就職してみるとやっと失った何かを意識するようになったのでしょうか。あるとき、ふと仕事の合間に窓越しに外を眺めるとハトより小さなほっそりとした1羽の鳥がピーピー泣きながら飛んでいます。枝にとまったのをまじまじと眺めるとスズメやカラスぐらいしか意識しなかった私には、驚きをもってその鳥を眺めたものです。今にして思えば、どこにでもいるヒヨドリ。その不思議な人相(鳥相?)に「こんな鳥がいるのか!」と本当に驚いてしまいました。

それ以来、20数年、様々な鳥を見るたびに季節やそれらの鳥が生息する環境を意識することができるようになりました。自然の少ない都会に住んでいると季節感を感じる事が少なくなっています。また、日本の伝統行事も年々廃れ、1年がモノトーンのように過ぎていきます。そんな中、仕事をしていても、街中を歩いても、そのとき目にした1羽の鳥が私に季節を運んできてくれるのです。「今日、この鳥に出会ったから春が近いな、もう夏だな」と感じさせてくれます。

いま、小さな川の土手を双眼鏡を持って散歩しています。川辺の小さな葦の群落を双眼鏡で覗きながら冬の鳥を探しています。

オオジュリンが葦の茎をくわえては何か餌を探しています。とそのときセッカが突然、私の目の前に現れました。今まで声とシルエットだけの付き合いでしかなかったこの鳥が数メートル先に現れたではないですか。こちらの方を気にしているようです。私は、慎重に双眼鏡でその顔を覗き込みながらセッカとのまた新しい出会いを楽しんでいます。



鳥と出会った人 : 安岡 久志